

〔伊呂波字類抄〕植物植物具大豆 菽

〔下學集〕草木大豆

〔和爾雅〕米穀大豆作菽 黃豆作豆

〔日本釋名〕米穀大豆 まはまるき也、めハ實也、みとめと通ず、丸き實なり、

〔東雅〕穀豆マメ 舊事紀に、保食神の臍尻に豆を生せしと見え、古事記には、大宜津比賣神の鼻

に小豆を生じて、尻に大豆を生せしと見えたり、マメとは萬葉集鈔に、マとは圓也といふ詞也と

見えたり、メとは實也、ミといひメといふは轉語也、其實の圓なるを言ひしなり、

〔倭訓栞〕前編二十九まめ 豆は丸實の義なるべし、菽も同じ、今世祝賀の物とするは忠誠の

義をとれり、通鑑集覽に、豆者眞實の物ともみえたり、○中 和名抄に烏豆をくろまめ、鵲豆をそび

まめ、珂孚豆をいちごまめ、菡豆をあぢまめ、豌豆をのらまめとよめり、そびは翡翠也、つばくらま

めともいふ、又鶉豆あり、鶉の羽色したり、栗豆あり、紫褐色也、鞍懸豆あり、四邊白く中黒し、又八升

豆あり、天竺豆あり、藤豆あり、葛豆あり、ともに藜豆の類也といへり、近來鶏頭豆あり、龍豆ともい

ふ、中の形狀にて名く、豆は常の白豆也、夏豆は梅豆也、豆腐によし、痰きり豆は稽豆なり、狐豆とも

いふ、たぬき豆は狸豆也、唐人豆といふは落花生也、

〔新撰字鏡〕草莢巨之反、平、菜、似、麻、又豆莖也、豆加良、

〔倭名類聚抄〕豆十七大豆附○ 野王按云、其音其、亦作莢、和名萬米加良、 豆莖也、

〔類聚名義抄〕豆五莢或莢、其音、マメカラ、

〔下學集〕草木莢魏曹子建七步詩云、煮豆燒豆、莢、豆、在、釜中泣、本是同根生、相煎何太急、云、

〔倭訓栞〕末編二十四まめがら 新撰字鏡に莢をよめり、豆莖の義也、節分の夜豆を熬に莢を焼い

わしを挾むに莢を用ゐ、信濃には雪國ゆへひ、らぎをもて、いわしまめがらをさすは焼ば音し